

「ミセス・エイカーズ」 Mrs Acres by David Llewellyn

その家は博物館ものだった。ウッドチップの壁紙に陶器のアヒルが壁にかかっている、暖炉の両側に犬の飾りが置かれていた。暖炉に石炭をくべて火を灯したのは大昔のことで、とうに醜い明るい青いガスの火に取って代われ、前に金属のグリルが置かれていた。テレビはグルンディッチ製で、フレームから画面が出っ張っていて、角が丸かった。肘掛椅子には椅子カバーがかかり、本棚にはキャサリン・クックソンの小説が置かれていた。廊下で大型の振り子式古時計が時を刻んでいる。家はラベンダーオイルの香りに満ちていた。

ラベンダーオイルとネコと。

ミセス・エイカーズが、お茶のトレイをカタカタいわせながらリビングルームに入ってきた。トレイには年代物みたいなティーポット、カップが二客に、小さなお皿に乗ったジャファケーキ【※1】。

「さあ、どうぞ、ミス・クーパー。」彼女は部屋の隅から大テーブルと組みになっている小テーブルを持ってきて、その上にトレイを置きながらいった。「ジャファケーキがお好きならいいんだけど。あいにくチョコ・ダイジェスティブ・クッキーが切れてしまったの。」

「ええ。」グエンは礼儀正しく微笑んだ。「大丈夫です。ありがとうございます。」

またいつもの午後ってわけ、グエンは判断を下した。他のメンバーが数々の冒険に飛び込んでいくところを想像した。彼らはもう、この謎を解決しているかもしれないし、そうだとしたら、間違いなく、ハブに戻って彼女が払った犠牲を笑いあっていることだろう。彼女は、この調査の第一容疑者として、とても奇怪な生き物が、ガラスの独房のひとつで歯をむき、うなっているところを思い描いてみた。

「大変なお仕事ね、失礼。」ミセス・エイカーズは擦り切れた足乗せに包帯を巻いた足を乗せ、くたびれた肘掛椅子にゆったりとくつろいだ。

「ええ。」グエンは紅茶を一口飲み、うなずいて同意した。

街のこの辺りでみんなでエキサイティングな探求をしたのも、遠い昔の話。このごろ、そんな探求をするときはたいてい、イアントがPDAで情報を集めながらジャックの前線に立っている。

「ネコが14匹に、イヌが8匹です。」

「でも、ペットだけ？」オーエンはたずねた。「愛玩動物だけ？」

「いまのところはそうです。」イアントは続けた。

「キツネの線はどう？」グエンが申し出た。「このごろ、街中に出没してるから。」

「チュパカブラは？」トシコはそれとなくいった。

「それ、お菓子の名前じゃないのか？」オーエンは無表情にいった。

「ヨタカだ！」ジャックは笑った。「チュパカブラ。しかし、英国で見かけたという記録は無いな。」

「他のイヌとか？」オーエンはたずねた。「つまり、みな意見を混ぜて返してすまない

けど・・・」

「もしそうなら、とんでもないイヌです。」イアントは遮った。「57キロもあったロットワイラー犬の頭を食いちぎってますから。」

ということで、グエンはここに、ミセス・エイカーズのリビングルームで紅茶を飲み、ジャファケーキを食べていた。

「ミセス・フィリップは、1月に旦那様を亡くされてねえ。」老女は続けた。「彼女、生まれて3か月の子犬は初めてだったの。本当に小さくてかわいかった。ちっちゃなウエストハイランドテリアよ。朝、彼女があの子を連れて散歩させているところを、あなたも見ていたらねえ。ローズ公園を端から端まで連れて歩くのよ。あの子、ずっと後ろに付いて歩いていた。」

ホールで時計だけが響いている。チク、タク。

「あの子が見つかった時のこと、覚えてるわ。3軒先に住んでいる男の子たちのひとりが見つけたの。友達と道外れに入ったら、あの子が見つかった。」

ミセス・エイカーズは悲しみに沈み、首を振った。

「恐ろしいことですわ。」彼女はため息をついた。

チームはスプロットまで来ると分かれた。トシコは周囲の地図を出し、ペットが襲われたり殺されたりした通りを確認した。襲撃は、この同じ通りの周囲に集中していた・・・コートニー街・・・そこでみんなは分かれ、1軒1軒たずねていった。

「まるでセールスマンか、」オーエンはジョークをいった。「エホバの証人みたいだ。」

他のみには少し引けてるみたい、とグエンは思った。トーチウッドの各メンバーは借金取りか、オーエンがいうところのセールスマンが家を間違えたかのように振る舞った。住人は有益な情報をほとんど持っていなかった。グエンは4軒目でミセス・エイカーズの玄関先にたどりついた。

「わたし、この辺りの出身ではないのですよ。」老女はだしぬけにいった。「カーディフ出身ではないの。山間地区で育ちましたの。ロンダの上のほうよ。上のほうで何をやってたか、ご存知でしょうね。一度、学校から戻ってきたら、叔母がシンクでうさぎの皮を剥いていたのを覚えてますわ。あなたはそんな光景見たことないでしょう。血の風呂につかっているみたいでしたわ！」

彼女は首を振り、穏やかに笑った。

「でも、ここで？カーディフで？少年の表情を見ましたわ。シーツみたいに真っ白だった。どんな状況を見たのか、想像もつきませんわ。」

グエンは紅茶をまた一口飲んだ。濃かった。祖母がいつも入れてくれる紅茶みたいだった。そこらで飲む紅茶とは違う味で、グエンはひきつった微笑みをティーカップで隠しながら、歳を取った女性たち御用達の紅茶の特別な店でもあるのかしら、と思った。

「もちろん、こんなことはゴシップ屋の格好のネタでしょう。」ミセス・エイカーズはカップを手にとって口に持って行くとき、信じられないという風に眉を持ち上げながらいっ

た。「スキャンダルの類があれば幸せだなんてねえ。」

「うん。」グエンはうなずき、ジャファケーキをひと噛みしながら、いった。ケーキが三日月型に残った。

「あなた、結婚してらっしゃるの、ミス・クーパー？」ミセス・エイカーズは、たずねた。そして、彼女は笑いだし、首を振った。

「ミス・クーパーだなんて！そういいながら結婚しているか聞くなんて、わたしもわたしですわ。」

「大丈夫です。」グエンはいった。「実のところ、婚約してます。」

ミセス・エイカーズは微笑んだ。

「素敵ですわ。」彼女はいった。「最近の若いカップルは頓着しませんからねえ。ただ一緒に住むだけ。それが悪いというわけではないんですよ。でも、彼らが公約することや誓いを立てることを特別だと思わないなんて、それがとても残念なんですの。」

グエンはもう一度部屋の中を見渡した。突然、家じゅうどこにも写真がないことに気付いた。色々なものを見るたび祖母の家を思い出すが、実際のところ、祖母の家の中は古い写真でびっしりと埋め尽くされていた。グエンの母の写真、叔母たち、叔父たちの写真、グエン自身といとこたちの子供時代の写真。学生時代の写真に、結婚式の写真。しかもつまみ食いエドワード時代の肖像写真。

ミセス・エイカーズは、写真を1枚も置いていなかった。

「あの・・・ミスター・エイカーズは・・・どうされたのですか？」グエンは細心の注意を払ってたずねた。

「亡くなりました。」ミセス・エイカーズは、グエンに優しく微笑みながらいった。「ずいぶん昔に、朝鮮で。1951年でした。もう、あそこへ派兵があったこと、みんな忘れがちですわ。」

家の中、どこかで足音しているのが、グエンの耳に届いた・・・音は横切って、階段を下りてくる。重い、どしどしいう足音で、誰か、きっと男性で、大きな音をさせて鼻をすすった。

「彼のことは気になさらないで。」ミセス・エイカーズはいった。「息子のコリンですわ。」

リビングルームの扉が開き、背の高いがっしりした40代の男性がリビングルームに入ってきた。彼はドア枠の中に描かれた乱雑な姿だった。安物のニットのタンクトップを身につけ、髪をべったりと横分けにしていた。彼は**年を取って見える**というより、ただ時代遅れの格好をしていた。

コリンは顔をしかめてグエンを見下ろし、ついで母親のほうを見た。

「こちらはミス・クーパー。」ミセス・エイカーズはいった。「彼女は御近所で起こったことについて話にいらっしゃったの。ペットのことよ。」

コリンは母親からグエンに視線を移すと、また母親に視線を戻した。

「きっと、キツネだろ。」彼の声はしゃべりにくそうで、モノトーンだった。「生ごみの

せいだ、そうだろ？ファーストフードの店の残飯、人々が側溝に捨てた食べた残し。キツネが街に入ってきてる。」

彼はまたグエンに向き直った。

「あんた、警察かい？」

グエンは首を振った。「いえ、そういうのでは。」

コリンはふんと鼻を鳴らしてふくれっ面し、そっとリビングルームを横切ってキッチンに行った。

「やかんかけるよ。お湯ほしい人は？」

「いえ、ありがとう。」ミセス・エイカーズはいった。「わたしたちは、ポットで入れますからね。」

食器棚が開いて閉まる音、やかんがコンロに乗る音、インスタント・コーヒーの顆粒をすくう音が、グエンに聞こえた。他のみんなはもうハブに戻ったのかな、と彼女は思った。彼女は無意識の中で、新婦付きそいのドレスと花の手配をどうしようと心配していた。手配を同時に行わなければならないことも一つだが、結婚式の準備が拷問のように思えてきた。

「で、」グエンはいった。「おふたりで住んでらっしゃるんですね？」

ミセス・エイカーズは、ティーカップを両手で握りしめ、窓の外の石鹸色の空を眺めながらうなずいた。

キッチンでは、お湯が沸き始めた。

「わたしたち、ふたりだけ。そうですわ。」ミセス・エイカーズはいった。「でも、わたしたちお互いに助け合ってきました。」

彼女はグエンに向き直った。

「あなた、お子様はいらっしゃるの？」

グエンは首を振った。

「あの、いえ・・・まだなんです。まだ。」

「子供がいるって素敵ですよ。」ミセス・エイカーズはいった。「ほとんどは、ですけどね。ミスター・エイカーズが亡くなったあと、わたしも子供を持つことになるとは思わなかったわ。」

グエンはキッチンの方を見やり、不器用にのしのし歩く巨漢がもぞもぞと冷蔵庫に向かうのが見えた。彼女の第一印象は当たっていた。コリンはどう見ても45歳以上には見えない。ミスター・エイカーズは、50年以上前に亡くなっている。

「おたずねしてよろしいですか。」グエンはいった。「コリンはおいくつですか？」

「よくわからないの。」ミセス・エイカーズは答えた。素敵な微笑みを浮かべながら・・・間違いなく人の良い微笑みで、グエンはだんだん慣れてきた。目にまで及ばない微笑み。母親たる者だけができる、我慢を重ねて癖になった微笑み。

グエンは椅子に座ったまま、前かがみに身を乗り出した。

「すみません？」彼女はたずねた。「どういう意味ですか？」

「わたし、看護婦でしたのよ。」ミセス・エイカーズは切り出した。「セント・ヘレン病院の。新しい方ではないの。古いほうのってことですわ。もう数年前に壊されてしまいましたけどね。ミスター・エイカーズは、ラグビー中に転んで、足首をくじいてしまったの。仲間が運び込んできたとき、彼は微笑み、ジョークをいい続けていましたわ。数ヵ月後、わたしたちはダンスパーティで出会い、彼からデートに誘ってくれました。彼ったら、本当に素敵でした。」

彼女は笑うと、首を振った。

「翌年の春、結婚しました。あのころは、待つてはられない時代でした。新婚旅行はボーンマスに行きましたわ。あの時代では最高の旅行場所でした。ホテルの海辺側の部屋で、三日間過ごしました。」

グエンはもう一度キッチンを見た。コリンは**最高の息子**と書かれたマグカップのコーヒーをかき混ぜていたが、彼の視線はグエンに向けられていた。

「彼はもちろん陸軍にいましたけど、本当にことが起こるまで、命令は下りませんでした。彼が軍にひどい仕打ちをされたと思ったことはありません。」

グエンは老女に注意を戻した。彼女はまだ微笑んでいたが、目に涙がにじんでいた。たった5分前まで、グエンは紅茶を飲み終えて出ていきたいと思っていたが、いまやそうすべきではないとわかってきた。

「結婚生活はどれくらいでした？」彼女はたずねた。

「全部で18ヵ月。」ミセス・エイカーズはいった。「2年にもなりませんでした。写真は全部屋根裏部屋の箱に入れてしまいました。初めは写真立てに入れて飾ってました。でも、そのうち、おわかりですわね。片方だけがどんどん歳を取っていってしまうんですもの。」

コリンがキッチンから出てきて、リビングルームの隅を注意深くサイドボードの飾りにぶつからないように進んでいった。彼はもう一度グエンを荒々しい緑と青の目で見降ろしたが、グエンが最初に感じた敵意はなんであれ、消えてなくなっていた。彼は妙に悲しそうだった。

「ぼくは上に行ってるからね。」彼はいった。

「わかったわ。」ミセス・エイカーズはいった。

コリンは部屋を出、再びどたどたという足音とともに階上に行った。ミセス・エイカーズはため息をついた。「いい子なのよ。ただ人見知りするだけなの。」

ホールで、振り子式古時計が半を打った。

「ミスター・エイカーが亡くなったあと、医者になる勉強を始めました。そのころは、看護婦が医者になるなんて聞いたこともない時代でした。わたし自身、なぜそう決心したのかわかりません。何かもっとやりたかったのでしょうか。仕事や勉強などのあれこれで気がまぎれました。ハードだったけど、その価値は十分ありました。」

「1958年、わたしはセント・ヘレン病院に、今度は医者として戻ってきました。わたしは救急部門で小児科を担当しました。そこで臨床部門のスタッフと仲良くなり、一時的に実験棟で働くことになりました。」

沈黙が。ミセス・エイカーズは、目の前のトレイに置いたティーカップの中の紅茶を見つめた。グエンは心臓の鼓動が速くなるのを感じた。

「あのころは、そこで薬の治験をやっていました。」ミセス・エイカーズは続けた。「薬やその他もろもろの。別棟の上の階、すべての病室で。初めて入ったとき、ぎよっとしました・・・どの籠の中も、籠の中は動物ががたがたと立てる音でいっぱいでした。」

「2、3年後、運び込まれてきたのです。誰かがドックで見つけた当てもなくさすらう子猫の兄弟たちを。家の無い子たち。誰かがわたしたちなら彼らを使えるだろうって思っていたのでした。古びたバナナの木箱の中で毛布にくるまれた8匹の小さな子猫たち。」

グエンはティーカップをトレイに戻し、カップがお皿にこすれて、空虚な音が鳴った。

「あら、紅茶が無くなってしまったのね。」ミセス・エイカーズはいった。「行って、ポットに作ってきますわ。」

グエンは手をあげ、もう結構といおうとしたが、ミセス・エイカーズは怪我をした足をかばいながらすでに立ちあがっていた。

「事故にでも遭われたのですか？」グエンは包帯を指しながらたずねた。

「何でも無いの。」ミセス・エイカーズは答えた。「かすり傷。」

老女がキッチンに向かう間、グエンはまた感じた。この匂い。警察にいたころ、グランジタウンまで、15匹のネコと暮らす女性のアパートをアンディと一緒に訪問したことがあった。女性がネコを虐待していると、議会と英国王立動物虐待防止協会に連絡があった。匂いはアパートの部屋の中だけではなかった。エレベータで階に降り立った瞬間、建物の10階の廊下まで動物の悪臭で満ちていた。

いま、グエンはまた匂いを感じている。でも何か違っていた。ネコの女性のアパートは、ネコの毛だらけで、家具は長年の間に引っかき傷だらけだった。それ以上に、女性の部屋はネコだらけ、ネコの汚物でいっぱいだった。裏出口の近くのトレイ、ドライフードのボウル、ミルクのお皿。ミセス・エイカーズの家には、そんなものは見当たらない。

「ペットを飼ってらっしゃいますか？」グエンはミセス・エイカーズに聞こえるように、声を上げた。

「いいえ、飼ってないですよ。」ミセス・エイカーズは答えた。「餌を買わなければいけませんしね、何をやるにも考えてあげないといけなくなるでしょう。」

彼女は紅茶とケーキの補充を乗せたトレイを持って、キッチンから戻ってきた。グエンにまたカップを渡し、ケーキを食べるようにと押しつけ、肘掛椅子によかれると深々とため息をついた。

「どこまで話したかしら？」彼女はいった。「頭の中をかき回さないと、出てこないんですのよ！」

「病院で働いてらっしゃったころのお話でした。」グエンは思い出せるようにいった。「実験棟のころの。」

「そうでした。」急に沈んだ声になって、ミセス・エイカーズはいった。「子ネコたち。」

「バナナの木箱に入っていて、毛布にくるまれていました。ひとりの先生が、子ネコを選び分け、ひととき小さな子にまで来た時でした。他の子には色がありました。飴色、黒、白。一匹なんかは、青灰色みたいな感じでした。どんな感じかおわかりですか？」

グエンはうなずいた。

「でも、一番小さい子は、」ミセス・エイカーズはいった。「ぼうやは、ただ小さなものが付いていて、他の子より小さくて、一筋も毛が生えてなかったの。誰もがこの子は一晩も持たないだろうって思ったのに、持ちこたえたわ。みんなでミルクを与え、冷えないようにしっかりくるんであげて、わたしが毎朝確認に行きました。」

「その時、気付いたのです。」

「何にですか？」グエンはたずねた。

「尻尾が無くなってしまったの。運び込まれてきたときは、あったのに、いまは無くなってしまっていた。そして、足が・・・その子の足が・・・その、**変わっていましたの。**」

「変わってって・・・どのように？」

「手のように見えました。小さな手。何かがおかしいということはわかりました。でも・・・こんなこと、目にするのは初めてでした。毎日、どこかが変わっていきました。目や耳や。やがて、わたしは何かしなければと思い、決心しました。わたしはその子を籠から出し、家に連れて帰りました。」

ミセス・エイカーズは再び窓の外を見た。一日中淀んでいた雲は、いまや濃い灰色になっていた。

「人々と一緒にいることで、」彼女は続けた。「彼は変わってきたのかもしれないと、ずっと、そう思っています。たぶん、彼は周りをコピーしているのでしょうね。わたしたちと長く過ごせば過ごすほど、そっくりになっていきました。確信があるわけではありませんわ。彼の中にあるものが何であれ、変わっていくのです。変わり続けていくのです。留まることはないの。」

「コリン・・・」グエンはつぶやいた。

ミセス・エイカーズはうなずいた。

「わたしが名づけました。ミスター・エイカーズにちなんで。病院の同僚には、子ネコは死んだといました。あの子は弱っていたので、誰も疑いませんでした。近所には、甥っ子だと、姉が亡くなったのだといました。」

「彼との出会いが、わたしの人生で最高のことでした。どれほど仕事に打ち込んでも、心の隙間は埋まりませんでした。でも、この小さな生き物の、この小さな**子供**の面倒を見るようになってからは・・・この子は、贈り物みたいでした。誰かがわたしにもたらしてくれた、すばらしい贈り物。彼なしで、わたしはここまで生きてこれたのかどうかわかり

ません。」

「そして、**これが**起こった。」

ミセス・エイカーズは、グエンを見た。彼女の眼は涙で光り、涙があふれて、しわの寄った頬に一筋流れて行った。

「**あなた**、トーチウッドでしょう？」

グエンは衝撃を受けたが、平静を保った。彼女は何もいわず、うなずいた。

「そうだろうと思いました。」ミセス・エイカーズはいった。「病院で働いていると、色々学ぶのよ。名前やら何やら。いつだって『沈黙は金なり』がモットーでしたわ。わたし、あなたが誰かを、誰でもいいので連れてきてくださればと思ってました。もう、どうすればよいかわからないのです。」

「彼女に話したんだね。」

その声に、思わずグエンは椅子の上で飛び跳ねた。ドアの方を見上げると、出入口にコリンが立っていた。でも、もう彼は違っていた。表情が動物的な嘲笑いでゆがみ、上唇が真ん中で鼻まで切れ込み、鼻が上向いて突き出ている。目は緑色に輝き、瞳孔は狭まり、縦のスリット状になって虹彩を二分していた。しゃべり方も、もはや元のしゃべりにくそうなモノトーンではなく、うなり声のようだった。

「コリン、」ミセス・エイカーズはいった。「こうしなければならなかったの。これがベストなのよ。あなたには助けが必要なのよ。」

彼は頭を彼女の方にすばやく動かすと、うなずいた。彼が足元を見降ろすと、グエンが見ている間にも手がこぶのようになり、こぶしに裂け目が出来、指の爪がかみそりのように鋭いかぎづめとなっていく。彼女はすばやく立ち上がり、銃を抜いた。

「お願い、」彼女はいった。「コリン・・・あたしの友達たちなら、あなたを助けられるかもしれない。」

「うそ付け！」コリンはうなり、グエンに向かってかぎづめを振りまわし、彼女の手から銃をもぎ取り、部屋の向こうに投げた。

グエンは一步後ずきると、サイドボードに張り付いた。コリンは彼女に迫り、両手を彼女の喉元に伸ばした。

「で、あんたの**友達たち**とやらは、ぼくに何をするんだ？」彼は歯の間からいった。「ぼくを実験台にするつもりだろ？ぼくを閉じ込めるんだろ？」

「違う。」グエンは説きつけた。「彼らなら、あなたを助けることができるの。約束する。彼らなら、あなたを助けるためにあらゆる手を尽くしてくれる。」

コリンはなにもいわなかった。彼女を覗き込み、口が彼女の顔のすぐ傍まで近づく。あごを開くとイヌのような牙が見え、息は腐った肉のいやな匂いがした。

「コリン、止めなさい！」ミセス・エイカーズはいった。その声は、自信に満ちた母親のそれだった。

コリンは振り返ると、彼女を見、荒い息で喉を鳴らした。

「もう十分。」ミセス・エイカーズは断固としていった。「**もう十分よ**。止めなさい、コリン。自分の姿をご覧なさい・・・これはあなたではないわ。彼女の話聞きなさい。」

コリンはグエンを振り返ると、優しくうなり、片足をそっと彼女の顔に近づけた。グエンが目をのぞき込むと、疲れ切った残り火の様な眼の中に、一瞬、希望を失って道に迷った子供のような何かが見えた。

「わたしを信じて。」グエンはいった。「傷つけないと約束する。」

コリンは喉を鳴らしながら後ろに下がり、うなだれた。そして、突然くると回り、部屋を飛び出すと、後ろ手にドアを閉めた。

ミセス・エイカーズは、暖炉のマントルピースで体を支え、むせび泣いた。

「わたしのせいだわ。この事件が起きた時、すぐに誰かに話すべきだったわ。わたしのせい。」

グエンは部屋を横切り、腕をミセス・エイカーズの肩に回した。

「いいえ、違う。あなたのせいではない。」彼女はなだめるようにいった。「本当に。」

グエンは深呼吸をすると、銃を探し、ジャックを呼んだ。

「ヘイ、グエン。」ジャックはいつもの元気あふれる声でいった。「モンスターを見つけたのか？」

「みたいなのはね。」グエンは返事した。「支援が必要なのよ。でも、頼むから、ジャック、静かに来てほしい。今回は、銃をギラギラさせないで。場所は、37コートニー街のスポット。できるだけ早くお願い。」

「トーチウッドね？」ミセス・エイカーズは、ハンカチでそっと涙を押さえながらたずねた。

グエンはうなずいた。「あたしは上に行って、コリンと話してきます。ここにいらして下さい。」

「いえ、いえ・・・」ミセス・エイカーズはいった。「彼があんな様子でなければ、何をするかわかるのに。」

グエンは部屋を出、ドアを閉める前にもう一度ミセス・エイカーズを振り返った。階段を半分上ったところで、グエンは銃を抜いた。ミセス・エイカーズに銃を抜くところを見られたくなかった。

「コリン、」彼女は踊り場近くで、呼びかけた。下のホールの、古時計の振り子の音が家の中の唯一の音で、その他は彼女が階段を上るときに階段がきしむ音だけだった。「コリン、わたし、二階に上がってるのよ。あなたを傷つけはしないから。」

バスルームから、物の割れる大きな音が聞こえ、それに続く苦痛のうめき声、低い悲しみに沈んだ嘆きは、氷の破片が彼女を貫くかのようだった。彼女は銃を握り締めたまま、踊り場をゆっくりと進んだ。バスルームのドアは開いており、隙間からオフホワイトのタイルに射す薄日が見えた。

そして、血が見えた。

彼女は片足で突く様にドアを開け、両手で銃を握って構えながら部屋に入った。しかし、その必要はなかった。コリンはバスタブの中に倒れ、片腕が力なくバスタブにぶら下がり、喉は大きく掻き切られ、片手に割れたガラスの破片を握っていた。彼はまだ生きていたが、血がどくどくと流れ出、喉を鳴らす声ももはややすりをかするほどかすかになっていた。

コリンは半分閉じた目で朦朧とグエンを見上げ、うなずいた。そして、息絶えた。

ジャックとイアントが数分後に到着した。彼らが遺体を片付けている間、グエンはミセス・エイカーズを慰めた。ジャックは、家を出る前に老女にレコンを飲ませたほうがよいのでは、とほのめかしたが、グエンは止めておくべきだと主張した。

「では、葬式は行わないということなのですね？」彼らが何の特徴も無い黒い遺体袋をSUVに積み込むのを見ながら、ミセス・エイカーズはたずねた。

グエンはうなずいた。

「まるで、最初から彼が存在しなかったみたいだ。」ミセス・エイカーズはいった。「たぶん、それがいいのでしょう。」

グエンが見ると、彼女の目から再び涙があふれ出て来た。彼女は老女を最後の慰めのために抱きしめた。ジャックがSUVの運転席から合図をした。

しわくちゃに丸めたハンカチを口にあてたミセス・エイカーズを家の玄関口に残し、彼らは去った。グエンはムーアランド街の角を曲がるまで、彼女から目を離せなかった。

「彼女をこのまま置いていくのは、気が咎める。」

「他に君に何が**できる**というんだ？」ジャックはいった。「彼女の人生を救えたかもしれないとでも。」

「いいえ。」グエンはいった。「わたしは彼女の人生を救えなかった。救ったのは彼だった。」

訳注

※1：ジャファケーキ：**Jaffa Cakes**。柔らかいクッキーの上にオレンジゼリーを乗せ、その上をチョコレートコーティングしたお菓子。

Notice 2009/11/21

このドキュメントは、Kubo Sachie が個人の楽しみとして作成したものです。

元の著作物の著作権を侵害する意図はありません。

また、日本語作成時の誤訳・文章脱落等は十二分にあります。訳の正確さを保証するものではありません。英語ではなく、日本語で読んで楽しんでもらえたら、と思います。

なお、物語の中の出来事、人物はすべて架空であり、現実との類似は偶然です。(あったら怖いかも・・・)

参考：使用した原文の出典

TORCHWOOD THE OFFICIAL MAGAGINE YEARBOOK

Published by Titan Books

First edition August 2008

'Mrs Acres' by David Llewellyn

ISBN-13: 978-1845769369